
当腎センターにおける災害対策に向けての取り組み

江島恵美子、日沼美津子、倉田みき子

秋田赤十字病院 腎センター

Some Measures against the Disaster in our kidney Center

Emiko Ebata, Mituko Hinuma, Mikiko Kurata

Akita Red Cross Hospital kidney Center

<はじめに>

阪神淡路大震災以降、危機管理や災害看護への取り組みが本格化してきたと言われている。平成13年の秋田腎不全研究会で秋田臨床工学技士会による「県内透析施設の災害時の危機管理体制」の発表があった。その中で、災害を想定してスタッフに訓練をしていない施設が52%、患者に訓練をしていない施設が81%と、スタッフ・患者ともに低い訓練実施であった¹⁾と報告された。当腎センターでも独自の災害に対するマニュアルがなく、災害時の患者指導や避難訓練を行っていない現状であった。災害時のパニック状態を回避し、安全に行動できるための患者およびスタッフ教育の必要性を感じたため、緊急時マニュアルを作成し、災害の学習会を行った。学習会前後で患者に意識調査した結果、今後の災害対策に対する示唆が得られたので報告する。

<Ⅰ 研究目的>

当院透析患者に災害についての学習会を行い、意識調査をもとに今後の災害対策のあり方を検討する。

<Ⅱ 研究方法>

1. 期間：平成14年3月1日～9月30日
2. 場所：秋田赤十字病院 腎センター
3. 対象：当院外来透析患者
4. 方法
 - 1) 腎センター緊急時マニュアルの作成
 - 2) 災害についての学習会の開催
 - 3) 学習会の前後で災害についての意識調査

<Ⅲ 実際と結果>

緊急時マニュアルを仙台赤十字病院の緊急時マニュアルを参考に作成した。

学習会前に、意思疎通のはかれる外来透析患者74名に対し、透析中の災害に不安を感じたことがあるか聞き取り調査した結果、「不安がある」が74名中29名（39%）。「不安がない」45名

(61%)であった。不安内容は「離脱できるか不安」が13名と最も多く、次に「地震時」や「担送・護送患者の避難方法について」が6名であった(図1)。不安がないと答えた45名中40名は、「災害について全く考えたことがない」「病院は防災設備が整っているし、スタッフが何とかしてくれるから大丈夫」との答えだった。他の5名は、「以前に災害に対する指導を受けたことがあり、避難方法を心得ているため心配していない」しかし、「自宅で災害に遭った場合や当院が透析不能時の対応については不安を感じる」と答えていた。

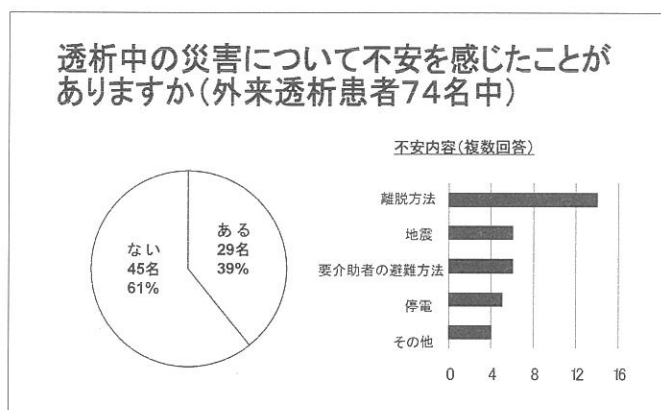


図1 学習会前の不安の有無と内容

学習会内容は聞き取り調査の結果をふまえ決定した。

- (1) ビデオ「透析患者さんの危機管理」による学習
- (2) 地震・停電・断水・火災における避難方法、避難経路、避難場所の説明
- (3) 学生ボランティアを患者役とした、透析緊急離脱方法のシミュレーションの見学
- (4) 緊急時の持ち出し物品の説明

不安の訴えが多かった離脱と避難経路・場所については、離脱のシミュレーションを見学してもらい、歩行できる患者は実際に避難経路を移動することで、災害時の避難方法がイメージしやすいようにした。また、災害に備えて心がけて欲しいことや各種災害時に自らできることを説明した。そのほか、災害に備えて心がけることや、緊急避難方法・経路についてはリフレットを作成し、各病床に常備した。

スタッフは、緊急時マニュアルを読み、各種災害時の行動を確認・統一し、学習会に臨んだ。緊急離脱方法については、トイレ介助時の離脱方法を応用した。必要物品は保護栓2個のみで、血液汚染がなく、ひとりの患者に30秒から40秒の短時間で離脱ができた。また、日常業務の中で訓練できるため、手技に戸惑うことはなかった。

学習会後のアンケートは、学習会に参加した32名に行った。回収率100%。「災害時の不安が軽減した」が31名、「軽減しない」1名であった。軽減した内容は、地震時、避難経路と場所、離脱の方法の順であった。軽減しない1名は、避難場所までの所要時間について不安があるとのことだった(図2)。

「今回の学習会を通して日頃から心がけたいことがあるか」に対し、「ある」27名「ない」5名であった。「ある」と答えた内容は、「スタッフの指示に従い冷静に行動する」「緊急連絡先や透析施設の連絡先の控えの携帯」「透析条件を覚えるなどの自己管理に努める」などであった

(表1)。

「今後、災害についての学習会が必要か」に対し、32名全員が必要と答え、定期的な実施、自宅で災害にあった場合の対応、当院が透析不能時の対応方法について知りたいと望む声が多かった(表2)。

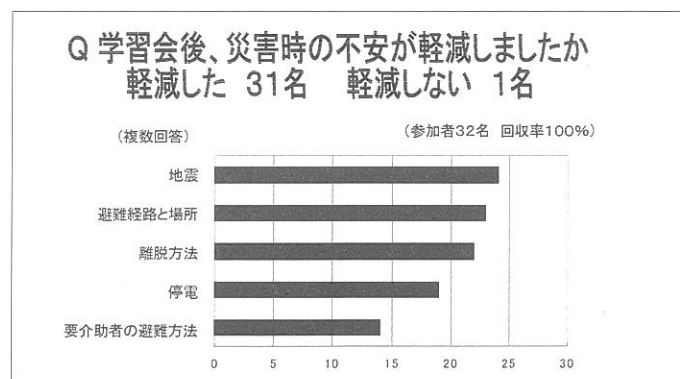


図2 学習会後のアンケート結果1

表1 学習会後のアンケート結果2

Q 学習会後、日頃から心がけたいと思ったことはありますか
「ある」27名 「ない」5名

心がけたい内容(複数回答)

・スタッフの指示に従い、冷静に行動する	10名
・緊急連絡先や透析施設の連絡先の控え等を携帯する	8名
・透析条件を覚える・食事に気をつける等、自己管理に努める	7名
・その他	15名

表2 学習会後のアンケート結果3

Q 今後も災害についての学習会が必要だと思いますか
「必要」32名 「必要でない」0名

どのような内容がよいか

・今回と同じ内容で、定期的な実施して欲しい	10名
・自宅で災害にあった場合や当院透析不能時の対応について知りたい	5名
・その他	3名

学習会後、スタッフからは「マニュアルを読むだけではなく、緊張感・緊迫感を感じながら緊急離脱や避難のシミュレーションを行うことで、災害時の対応がイメージでき自分のとるべき行動が分かった」との感想が聞かれた。

<IV 考察>

患者の不安内容をふまえた学習会は、患者が実際の災害時をイメージすることができ、災害時の対処行動が分かったことで不安の軽減につながったと考えられる。不安がないと答えていた人も、学習会後には不安が軽減したと答えた。これは他人事のように考えていた災害を、学習会を通して自分の問題ととらえ、災害の基本である「自分の生命・身体・財産は自分で守る」²⁾という気持ちが患者の中で生まれたためではないか。それにより、災害に対する学習の理解が高まることとなり、不安の軽減につながったと考える。学習会前の災害時の不安の有無にかかわらず、参加者の多数が日頃から自分で心がけたい具体的な内容を答えていることから、災害時の対処行動を学び体験することで、災害に対する意識の向上がはかられたと考える。

学習会参加者全員が、今後も学習会や訓練が必要であると考えており、自宅で災害にあった場

合や、透析不能時の対応方法について知りたいと望んでいることが分かった。当腎センターと患者との連絡方法の確立や、他の透析施設との連携が重要であり、今後の検討課題である。

緊急時マニュアルの作成、離脱のシミュレーションの体験により、スタッフ間の災害時の対応が統一でき、互いの行動を確認することができた。小林らは「知識の学びと身体を使って覚えたことは実際のとき行動できる」³⁾と述べているように緊急時に力を発揮するために継続的な教育訓練を行う必要がある。

<V 結論>

当腎センターにおける今後の災害対策への取り組みとして

1. 患者参加型の定期的な学習会は必要である
 2. 当腎センターと患者との連絡方法の確立や、他の透析施設との連携が重要である
 3. 緊急時に力を発揮するためにスタッフは継続的な教育訓練が必要である
- という示唆が得られた。

<謝 辞>

この研究を進めるにあたり、ご協力をいただきました患者様、スタッフの皆様に深く感謝いたします。

引 用 文 献

- 1) 佐藤 智：アンケート調査による県内透析施設の災害時の危機管理体制、秋田腎不全研究会誌、VOL 5、P67-69、2002
- 2) 宇田有希：災害時の緊急血液浄化法(2)看護、臨牀透析、12(11)：1537-1540、1996
- 3) 小林康江：災害発生直後の状況と看護活動 P4-20、日本看護協会出版社、東京、1998

参 考 文 献

- 1) 内藤秀宗、申曾洙、日台英雄、篠田俊雄、坂井瑠美、山崎親雄：再確認！わが施設の防災対策、透析ケア、VOL 6：11-42、2000
- 2) 浅野 泰、坂井瑠美、宮本 孝、日台英雄、小中節子：阪神大震災、1年をふりかえって透析ケア、VOL 2：13-46、1996
- 3) 阪神大震災から得るもの、臨牀透析、6月特別臨時増刊号、VOL 11：1995
- 4) 岡山ミサ子：図解で学ぶ、透析看護技術のコツ、透析ケア：101-105、2002